

天使達の 課題



タカ・イイツカ

天使には奇跡を起こせない。

魔法も使えない。

『人間に大切なもの』を探しに、
二人の冒険が始まった。



ここは雲の上にある天使の学校。

人間の文化、生活を学ぶ天使達が集まっている。

卒業を控えた彼女達に、学長から課題が与えられた。

「人々が大切にしているものを探して来なさい」

生徒達が口にする。

「生命?」「健康?」「幸福?」「財産?」

学長は全員の顔を見渡し、

「正解はない。今まで学んできたことを活かし、人と接して感じ取って来なさい。二人で一組だ。」



ミディウムヘアーの天使、名前はマイ。ロングヘアーの天使は、ジュン。二人とも成績がいい方ではないが、生徒の中で唯一、マイがベスパの運転ができ、ベスパが貸与された。

マイとペアを組むことになった、いつも元気なジュンとは大の仲良し。

地上の世界に入る前に空間を超える時に起こるショックの事、人間と接することへの注意事項、地上に降りてからまず立ち寄るべき場所などを学長の説明を受け、地上への日帰り研修旅行がスタートした。



地上で走行できるように仕上げてあるベスパだが、雲の上では音を立てずに滑るように雲の上を走ってゆく。

マイは、地上を想定した運転研修で行ったシフトチェンジやクラッチ操作を試したくて仕方ない。

後ろに乗ったジュンは、教科書でしか見たことのない地上の世界に想像が膨らんでワクワク感が止まらない。

しばらくすると雲がなくなり、辺りは真っ暗になる。

ガクッ。二人は大きな振動を感じた。



二人は地上に着地した感触を受けた。

突然、エンジンから音が聞こえ、オイルが燃焼する甘い匂いがした。

「あれ、エンジンかかっている。」マイが驚いた。後ろに乗ったジュンが

「この子生きてるんじゃない?」

マイがベスパーに聞いてみる

「あなたは生きているの?」

「ピッ」小さくクラクションが鳴った。
シフトアップしたマイが

「ベスパ98だからキューちゃんね」

「ピッ」

地上は夜が明けるところだった。



海岸沿いに出ると、二人は天使になつてから初めて潮風を感じた。

海から放出される多大なエネルギーを二人は吸収する。

「これが海かあ。広いねえ」ジュンが呟いた。

しばらく快適に走っていたが、徐々にシフトするストロークが広がっていることにマイは気づいた。

「キューちゃんの様子がおかしい」

二人は学長の指示にあった、最初の立ち寄り先に向かった。

「キューちゃん、無理しないでね」ジュンはシートの後端を優しく撫でた。



二人はアキの仕事場に行った。

アキは金属加工業で地上の生活を送っているが、雲の上から派遣されている。言わば在地下外交官か。

三人はテーブルを囲み、マイは慣れた手つきでコーヒーマシンを淹れる。隣に座ったジュンがメモ帳を開き、

「アキさん、私たち、この世界の大切なものを見つけるのに、どこへいけばいいとおもう？」

「そうだなあ、まず子供達に接してみるのがいいるだろう。この国は戦争で全てを失い、復興、経済発展にまっしぐら。大人に接しても面白くないかもな」



大人達は日々の生活で忙しく、子供達は子供同士で遊んでいる時間が増えてきたように見える。そんな話をしているアキに、マイがベスパを指差し「そうそう、この子、変速するときには手を回す時の感覚がおかしいの」アキはカップを置いて立ち上がり、ベスパの左グリップを捻ってみた。

「ああ、ワイヤーが緩んでいるんだろう」

アキは工具箱から小さなレンチを2本手に取り、床に寝そべって車両の後方にある変速装置のワイヤー調整を行なった。その特殊な作業をジュンは興味津々で覗き込んだ。



アキの職場の壁に貼ってある住宅地図がマイの目にとまる。近所の公園や学校の位置を確認しメモをとる。マイがベスパを押して二人は外へ出る。後からアキも外に出てきて

「来週、私も学校に行くから、学長によろしくね」

二人はぺこりと頭を下げ、エンジンを始動。調整したシフトを一速に入れて走り出す。

ピッ。クラクションが小さく鳴る。見送っていたアキがニヤツとする。

「キューちゃん、よくできました」

マイはハンドル中央を優しく撫でた。



あまり人気のない住宅街、路地をしばらくトコトコ走っていると、小学校に着いた。

門が空いていたので、校庭まで入ってみる。休み時間なのだろうか、子供達が遊んでいる様子が見えた。

二人に気がついた小さな男の子

「あゝ！天使だゝ！」

叫びながら二人の方へやってくる。

その声につられて上級生と思われる女の子二人もマイとジュンの方にやってくる。

二人の天使、初めての人間と遭遇する。



男の子が両手を高く上げてマイに駆け寄ってくる。マイも両手を広げて向かい入れる。男の子はマイの胸元に深く顔を埋め抱きしめた。

そんな宗教絵画のような光景を見たジュンはうっとり見つめていた。背後では両翼を二人の女の子が撫でている。

「わあ〜天使だあ〜」

子供達のぬくもりを通じて、様々な感情が二人の天使達に伝わってきた。

「大切なもの」マイが呟く。

三人の子供達は、今まで味わったことの無い愛に満たされた感覚を覚えた。

チャイムがなり、子供達は手を振りながら校舎に入って行った。



土手沿いの道を走っていると、グラウンドに出た。

ベンチに腰掛ける老人、赤ちゃんをあやす母親、野犬、野良猫。誰もが穏やかな時間をゆっくり過ごしている。

「大切なものがいっぱい」ジュンが囁く。
優しい風に揺られ草木が揺れる音、遠くを走る車の走行音、ベスパの走行音にそんな声はかき消される。

前方でふんわり舞い上がる土煙を見つめながら、この世界で穏やかでいることの大切さを感じた。



中学校の前で、ジュンは今まで感じた
事の無い愛の力を感じ取った。

「マイちゃん、停めて」

マイはベスパを止め、スタンドを掛けた。
校舎の方に目をやり、

「ただの愛の力じゃないねえ。」

校舎から出てくる生徒に目をやってい
たジュンが、

「これは、もしかして、恋。」

恋の相手と思われる男の子が校門から
出てくる。ジュンはそっと近寄り

「こんにちは」

「て、天使。俺、死んだの？」

ジュンは男の子の肩にそっと手をやった。



恋する女の子が校門から出てくる。

マイは女の子にそっと近づき、同じ方向に歩きながら「こんにちは」と声をかける。

少し驚いている女の子に

「天使だよ。あなたも天使なのかと思ったよ」

2メートル程先のジュンが足止めしている男の子の方に、マイは女の子と話しながら歩いて行く。やがて男の子の肩と女の子の肩がふわっと接触。

その瞬間、両端にいたマイとジュンが愛を注ぐ。マイとジュンはそっと離れ、男の子と女の子の肩がくっついたり離れたりしながら歩いて行くのを見守った。



「ねえマイちゃん、私たち、愛のキューピッドになれたかなあ」

「キューピッドは神様でしょ。赤ちゃんだし、裸だし。プッ。」

「天使の方が気楽でいいか」「そうね」

楽しくやっている二人の前方で、再び恋の力を感じ取った。

やがて視界に先ほど出会った男の子と女の子が並んで歩いている様子が入ってきた。マイはベスパを路肩に停め、ジュンと一緒にベスパの後ろに身を隠し、男の子と女の子が目の前を通過するのを待った。



近づいてくる二人の様子を見てマイが
「楽しそうにお話ししてるね」

ジュンはマイの手を握りしめ

「照れくさそうな顔してる。可愛い」

男の子と女の子は通り過ぎていった。

会話の内容までは聞き取れなかったが、
恋心が芽生えて行く後ろ姿が見えなくな
るまで見送る天使達。マイはジュンの肩
にポンと手を乗せ

「ジュンちゃん、これも大切なものだね」
「恋。素敵」

マイとジュン、恋の余韻が残る路地を
行った。



二人を乗せたベスパは駅前を通る。

高架橋を見上げたジュン

「電車ってこんなに大きいんだね」

「そうだね。こんなに大きな音がするとは思わなかったよ」

ジュンが小さな自動販売機を指差す。

「マイちゃん、明るい家族計画ってなんだろう」目をやるマイ、

「微生物かなあ」

駅前には、商店、目を引く看板など、二人の知らないものがたくさんあった。

二人と同じ年頃の女の子が同じ方向から歩いてくる。大学があった。



大学に入ると一瞬にして学生たちに囲まれるマイとジュン。

学生たちの衣装が華やかで、刺激を受ける。ここでも恋は大切なもののようにだが、中学生とは事情が大きく異なるようだ。色々話を聞いていたが、知らない言葉が多く、理解できた内容は六割程度だった。

学生たちの話によると、敷地内に病院があるという。マイがベスパを押して歩いていると、渡り廊下を車椅子で押されている子供がいた。マイとジュンに顔を向け、ニコツと笑顔を見せた。

二人も笑顔で返し、小さく手を振った。



後部座席にジュンが乗ったことを確認したマイ。

「健康も大切だね」

「そうだね。病気も怪我也怖いね」

地上では、危険なものが多数存在している。人々はそれらを避け、時には闘いながら日々を送っている。自分達の無力さを感じる二人だった。

二人を乗せたベスパは国道に出る。長い登り坂、アクセルを全開にするが車の流れについていけない。後部のジュンが「キューちゃん辛そうだねえ。休憩しようよ」



国道から少し入った高台に広場を見つけた。

三人で遊んでいた小さな子供たちが近づいてくいる。一番背の高い女の子がマイに声をかける。

「お姉さん、天使？」

「そうだよ。お友達になってくれる？」

女の子はうなづいてマイに寄りかかってきた。一番背の低い男の子はジュンの両腕を背負うように手を握り、温もりを求め、もじもじしていた女の子もマイに背を向けて寄りかかると、マイは女の子の肩に優しく手を置いた。



「私も天使になりたい。なれるかなあ」とマイが問われ

「なれるといいね」と答えるしか無い。

しばらく話をしたり、ベスパに乗せて遊んでいたが、陽が傾き、子供達は家に帰る時間になる。

ジュンの懷に潜ったままの男の子が

「ねえ、明日もここにいます?」

ジュンは男の子を見つめて

「明日は雲の上よ」男の子はジュンの胸元がビショビシになるまで泣き続けた。

二人の女の子もマイの腕の中で泣き続けた。マイとジュンは再会の約束ができな
いのが辛かった。



日没が迫っている街を走っていると、
感傷的になっていたジュンが

「涙は大切だよね」

マイは声が出せず、ただ頷いた。

あたりの家では部屋の灯りが点いてきた。家の中から子供の声が聞こえる。夕飯を準備するお母さんの楽しそうな笑い声、魚を焼く匂いが漂ってくる。西陽に目を細めたマイが

「ジュンちゃん、寂しいは大切なあ」

オレンジ色に染まった空をぼーっと見つめ、ジュンが答える。

「多分この世界では必要なんだね」



マイの涙が風に流され、ジュンの頬に
当たった。

なんとか日没前に郊外に出たマイと
ジュン。旅の終わりに地上で人間に大切
なものを一つずつ思い返していた。

沈みそうな夕日を見てジュンが

「そうだ、人間は家族を大切にしている」

加速して前傾姿勢のマイ

「教科書にもそう書いてあったね。家族
かあ。楽しいんだろうね」

ピッ、クラクションが鳴ってベスパが
浮上した。



二人が地上から戻って数日後、アキが学校に来ていると知ったマイとジュンは実習室でベスパのキューちゃんの手入れをしているアキに会いに行った。

「よお、課題のレポートはうまく行ったみたいだね」テーブル越しに向かい合った椅子を引いたジュン

「アキさんのおかげだよ。ありがとう」

一度ジュンに顔をむけ、マイが

「ほんと、アキさんのアドバイスが良かった。」

レポートの大切なものに『寂しい』と『涙』を選んだ二人は高い評価を受けた。

「良かった良かった」

アキは深く頷いた。



広場で泣きじゃくっていた男の子は、
ジュンの背中に乗って空を飛んでいる夢
を見た。

夢から覚めると、また泣いてしまった。



「天使が降りてきた」という作品を作っている最中に、この子たちを旅に出そうと思った。

実際、ベスパ東京日本橋で開催されたタカ・イイツカ展では一ヶ月くらい日本橋浜町のショールームの旅に出していた。日本橋から横浜に帰ってきたマイとジュンの物語はその日から制作を始める。二人が様々なところを訪れるシーンは既に何点か撮影しており、2週間程度で追加シーンを制作。日本橋から戻ったマイとジュンを再度撮影。

今回の旅に同行した私も、大切なものを見つけたような気がする。

2025年12月27日

タカ・イイツカ



天使達の 課題

ゝ Taka Iizuka